

自分の考えや思いを表現することを通して、

自己を見つめながら学ぶ子どもの育成をめざす

指定校 2 年次 木島平村立木島平小学校 山崎 秀樹

中澤かおり

1 本校での新聞活用（NIE）の現状

木島平小学校は、平成 26 年度にスクールコミュニティ—小中学校—貫教育とを本格実施するために、小学校・中学校・木島平村教育委員会や地域の方々と連携をとりながら授業改善を行っている。それは、子どもの学ぶ権利を保証し、生涯の学び手となれる子どもたちの育成を目指す学校づくりをしているからである。

日々の授業の中で大切にしていることは、互いの意見や考えを聴き合ったり、わからない子がいたら助け合ったりする協同の学びである。「できる」ということをよしとするのではなく、「わからない」「困っている」という言葉を大切に、子どもたち同士が互いに学び合い、理解を深めていく姿を目指し、教師も学び手の一人として授業を行っている。

しかし、授業をしていると全員の声を聞くことは難しい。特に高学年に進むにつれて、自分の思いや考えがあっても授業の中で伝えられる子が固定してしまうのも事実である。無口な子どもたちの中にも、大切にしたい考えや思いはある。日々の授業の中で、互いの考えや思いが認められ、安心して学ぶことができる授業をめざすことが求められる。

そこで、今年度は、人間関係が固定化し始めている 5 年生を中心に、普段気づかずにいる友達の思いや考えに触れる学習を大切にしようと考えた。特に、今年度は社会と自分をつなげることに重点をおき、そこから自分たちが感じたことや考えたことを互いに伝える活動を中心にしてきた。

2 実践のねらい（育てたい力）

- ・新聞を使った学習を通して、自分が社会の中の一員であることを意識してほしい。
- ・社会で起きていることと自分をつなげ、意思を持つ人になってほしい。
- ・新聞記事から読み取れる人々の思いや友達の考え・思いを知り、自分の考えや思いを広げたり深めたりしていけるようになってほしい。

< NIE の実践を通して >

自分の意思をもち、自分と似た意見や異なる意見をもとにして、さらに考えや思いを広げたり、深めたりしていける子どもたちになってほしい。

3 研究の概要

(1) 利用した新聞と利用期間

利用した新聞	信濃毎日新聞、朝日新聞、毎日新聞 読売新聞、産経新聞、日本経済新聞	利用した期間	5 月～11 月（8 月除く）
--------	--------------------------------------	--------	-----------------

(2) 新聞と関わるために実践してきたこと

① 廊下への新聞置き場の設置

高学年棟廊下に新聞置き場を設置。いつでも、新聞を見られる環境を作った。新聞が身近にあるという環境が、新聞を見ることへの抵抗感をなくしてきていた。昨年度より、新聞と関わる児童が増えてきている。6年生は、廊下にある新聞記事を見て社会で起きていることを話題にするようになってきた。また、5年生では、読書の時間に新聞を読む機会を取り入れたところ、自発的に新聞を読む子が増え、毎日くる新聞を楽しみにしている姿が見られるようになった。新聞が身近になるためには、場の提供だけでなく、その場に行くとい必ず新聞があるという安心感があることが必要であることが示唆されている。また、読む機会を大切にすることで、次第に社会の出来事に興味を持ち、自分と社会をつなぐ姿に近づくのではないかと考えられる。

② 週一回の新聞記事の切り抜きとそれに対する感想を書く活動（5年生昨年度より継続）

NIE 活動で頂いている新聞を中心に、毎週一回記事を切り取り、それに対するコメントを記入する活動を継続的に行ってきた。

昨年度より継続していることもあり、子どもたちは抵抗感なく活動することができている。また、記事の内容についても社会面の内容が増え、社会で起きていることに興味を持っている子どもたちが増えてきた。



見出し ケーキやピザで味わって

メモ (記事の要約や、感想・疑問などがあれば書きとめておこう！)

西産果木桜桃、とても強い酸味を生かして使っているの。どうやってつくってるの？ これか食べてみたい。おいしいぞ！

< 4年生で取り組み始めた頃の切り抜き ↑ >

< 一年間継続した後の切り抜きへのコメント ↓ >

見出し 区画整理・ホテル生息環境 おごと 田舎

メモ (記事の要約や、感想・疑問などがあれば書きとめておこう！)

確認されたホテル延べ数が年々増加されていく、いいことだなあと思いました。自然を大事にする、大切なことだと思いました。大事に育ててほしいと思いましたが、ホテルは自然の恵みを生かして、美しい光をみせてもらうという気持ちで、成果にたどり着く。感謝の気持ちで、こめて見たいです。人の心が結果に反映される。ホテルがかわる原因は、水もきれいな環境、街路灯や民家の明かりが、ホテルがすまにくく、たんぱいのがいいなと思いました。

区画整理：ホテル生息環境まるごと「引っ越し」

松本「庄内ほたと水辺の会」

長野県から選ばれた松本市の「庄内ほたと水辺の会」はホテルの生息環境の保護に取り組んでいる団体で、同市内地区の住民で2006年に発足。地区内の大規模な土地開発事業に当たり、豊かな自然環境を守ろうと20年11月、市に働き掛け「イクボス」が生息する小川の底の泥や土の手、草ごと、新たに設けた水路に「引っ越し」させ、生息環境を保全した住民が中心だ。生息環境ごと移す手法は先駆的な取り組みとされる。

水路は庄内北公園を通り、長さ約40m、幅1〜3m。ホテルに詳しい信州大理学部（松本市）の藤山静雄教授の助言を受け、ボランティアで水路の草刈りや清掃を行い、勉強会や観察会も開いている。近くの商業施設の照明を

巡るため、水路の周りに市と共同でヤナギを植え、よさを張り巡らす工夫をしている。

確認されたホテルの延べ数は11年が4000匹余、12年は3000匹余、13年は3000匹余と年々増加。暮らす多くの住民が現地に訪れ、地域の自然を大事にする環境学習の場になっている。

今年7月には、ホテルの環境や生息環境の保護に取り組む市民団体や専門家らとともに、ネットワーク組織「松本ホテル学会」を発足。子ども向けの勉強会を開き、発生・分布情報も共有する。ホテルの生息環境を整えたいと考えている他地域に会員が指導し、出向くほか、市内の小中学校の環境教育にも参加する考えで、次世代に活動を伝え、広めることにも力を注いでいる。

③道徳の資料として扱う

東日本大震災で泥まみれになった写真を修復する作業を続ける人たちの大事にしている気持ちから、自分たちの生き方や大事にしたいことを考える。

6年生になったときに、全校が楽しめるような企画を立てたり縁の下の力持ちとして働いていたりすることが、児童会を進める上で大切だという気持ちを持つことにつながった。

④社会科で「これからの食料生産～農業問題を考える～」取り組み（5年2組）

学習の中で、子どもたちから「TPP」や「減反廃止」についての質問が出された。そこで、新聞から関連する記事を探し、見出しやリード文を中心に読み取り、記事に関連させながら読み深めていった。

子どもたちにとって、いま日本の農業が置かれている厳しい現状や農家の方たちの努力を知るとともに、自分たちの住む木島平村や自分自身の生活について考える機会となった。また、TPPに関しては、農業の面からだけでなく、工業や知的財産などいろいろな立場の人によって、考えが違うことなどにも触れることができた。



私の家は農業をやっているのですが、TPPは絶対に反対と思っていましたが、工場の人たちの記事を読んで、TPPに賛成する人もいるんだということを知ってちょっとびっくりしました。でも自分の家の人々が工場に勤めていたら、自分も賛成の方になるのかなと迷いました。

新聞を使った学習では、毎回いろいろな発見があって楽しかったです。例えば先月は「TPPの交渉があまり進んでいないなあ。」と思っていたのに、「今月は、もうそんなにいろいろな国と話が進んできたの？」というくらい動きを感じることができました。今起きていることを今勉強できるのがいいと思いました。

3 NIE 実践の内容

(1) 単元名「私がもらった勇気や元気」

～私が学んだことや考えたことを発信しよう～ 全11時間扱い

(2) 授業クラス 5年1組（男子11名 女子14名 計25名）

(3) 子どもたちに対して感じていることと単元設定の理由

①これまでの取り組みから成果として感じられること

○スクラップブックへの取り組み（週一回）からの姿

→昨年度からの取り組みの継続。活字に対して抵抗感があった子どもたちだが、次第に記事を読むことにも慣れてきている。（およそクラスの3分の2程度）。

→新聞に対して抵抗感が薄れてきているようで、読書の時間の時に読んだり、時間があるときには新聞を眺めている。

○昨年度の取り組みの成果として、文章が簡潔になってきている。

- 伝えたいことをはっきりさせることができるようになってきている。
- 読み手を意識した文章になれてきている。(文がすっきりとしてきた。)

②課題と感じている姿

●どこかで人ごとになっている意識

→子どもたちが書いてくる記事へのコメントに「かわいそう」という言葉がよく使われている。また、社会的事実を扱う授業のなかでも「かわいそう」という言葉をよく使う子が多かった。どこか、自分事のように感じていない。また、「こうした方がいいと思う」と正論をいうけれど…自分の姿は見つめられていない。そのため、友達の意見について、関わっていくことができない子がいる。

●興味ある事実としかつながらない

→子どもたちの話題を聞いていると、一部の女の子は「芸能界」に興味を示している。ネットについての記事を読んでいることもあるが、記事の内容をうのみにしている感じがある。
→スクラップブックの記事の選択にまだまだ社会情勢が少ない。特に男子は、読みやすい「スポーツ」的な内容が多い。

<担任の願い>

- ・社会で起きているいろいろな事実に触れ、世界を広められるようになってほしい。
- ・得た情報をもとに、今までの自分の経験と結びつけた自分の考えや思いを自分の言葉で語れる子どもたちになってほしい。
- ・今後、社会に出たときに互いに意見を交わすことが必要となってくる。自分の意見ばかりでなく、友達の意見にも関わり、考えを広めていけるような子どもたちになってほしい。

以上のことから、「私がもらった勇気や元気」という単元を設定した。新聞には、社会で起きている事実の他にも、たくさんの人たちの考えが記事となって掲載されている。また、記事の中にあるコメントから人の想いにも触れることができるだろう。

「私がもらった勇気や元気」という内容を取り扱うことで、これからの社会を生きる子どもたちが、未来をつくるために努力している人たちの想いに触れることができると考える。そして、想いを通して自分の認識を変化させ、自分なりの意見を持てるようになってほしいと考えている。さらに、取り組んだことを「建設標」に投稿することを最終目標とすることで、読み手を意識した文章を書く必然性が生まれ、社会とつながっていくことを感じる事が期待できる。

何よりも、社会で起きていることや人々の想いを人ごとにするのではなく、共感したり批判したりしながら、これからの自分へ生かしていこうとする気持ちをもってほしいと願っている。

(4) 単元展開の実際 (全11時間扱い)

時間	学習活動	段階	学習内容→子ども達の感想や反応 ※担任のおもいや支援
1	○勇気がもらえそうな記事に触れる。 ○建設標「10代	社会と自分をつなぐ	<ul style="list-style-type: none"> ・小布施で町を活性化しようとする記事を全体で扱う ・担任より、3つの記事について紹介する。 ・記事の内容を全員で読みながら、感じたことを出し合った。 ※全体で一つの記事を扱うことで、感じ方が違うことにも触

から」の記事に触れ、活動の見通しを持つ。

れさせたいと考えていた。何よりも、具体的に記事を読むことによって見通しが持てようにしたいと考えた。

※3つの記事について紹介することで、活動の見通しを立てるようにした。記事1つ1つにコメントをつけ、自分の感じたことを文に表すことで、意見が持てていけばよいと考えていた。

・信濃毎日新聞に掲載されている「10代から」の建設標の内容を読む。

→建設標の紹介をしたところ、自分たちと同じ年代の人たちが意見文を出していることに驚きを感じていた。

→「自分の意見が載ったらしいいな」といっている子も見られた。

→自分たちの意見が掲載されたらすてきだなと思い、活動の見通しを持つ子が多くいた。

・「新聞記事の内容を全部読まなくてはいけないのか」という質問が出され、クラスで考える。

→「全部読む必要ないよ。だって、見出しって確か記事で言いたいことを言うところだったじゃん。だから、見出しをみれば何となくわかるんじゃないかな。」

→「詳しく読むには、どうするの？全部読まなくちゃダメなの？」

→「それなら、リード文を読めばいいじゃん。リード文って、大まかなことを書いた文だから、それでわかるんじゃないかな。」

3 ○勇気や元気になれるような記事を集める。

記事と自分をつなぐ

・新聞記事を見ながら、勇気や元気になれるような記事を見つける。

→見通しが持てた子どもたちは、早速今までためた新聞記事を眺めながら記事集めを始めた。

→最初は、眺めているだけの子どもたちだったが次第に気になる記事が見つかり集め出した。

→一人ひとりが記事を見ながらも、わからないときには「見出しってこれだっけ？」「この漢字、なんて読むの？」と言いながら記事を集めていた。



○おじいちゃんやおばあちゃんと関わりながら、記事を見つける。

※記事を見つけられない子どもたちにとって、記事集めは容易ではない。クラスの仲間だけだと、似たような意見になってしまうと考えていた。そこで、祖父母参観に来て頂いた祖父母や保護者の方にも一緒に記事を探してもらう時間



をとった。子どもたちでは気づかない、新しい価値観をもった記事と出会うのではないかと期待してのことだった。

(写真は、奇跡の一本松について紹介してもらっている様子)

→地域の方や保護者の方に記事を紹介してもらうことで新しい観点で記事集めをすることができた子もいた。
→写真の女の子は、友達のおじいちゃんに記事を紹介してもらったことで、うれしそうに「奇跡の一本松」の記事を自分の手元に置いていた。

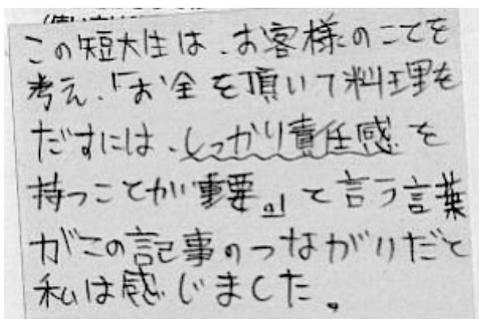
5 ○絞った記事の内容を理解する。
記事の内容を理解し、考えをはっきりさせる。

・辞書を使ったり、友達と相談したりしながら、記事の内容を理解する。
→自分の集めた記事を見ながら、わからない漢字や内容を聞きながら行っていた。
→友達はどんな記事を集めたんだろうかと互いに見合いながら学習を進める姿があった。



※このときに、付箋を使って記事にコメントをつけるようにした。読んでいても自分の気持ちは表出しない。一言でもコメントをつけることによって、自分の意見を客観的に見れるのではないかと考えていた。

K児がもった考え → (写真左奥)



※コメントをつけることで子どもたちが大切にしていることが見えてきたととらえる。1つ1つの記事をつなげてみることで、その子の持っている大事にしたい部分が見えてきた。

信州ワイド

地域と連携 商品考案 短大生「お店」オープン

長野

清泉学院大(長野市)国際文化ニケーション科の2年生が19日、自ら考案したスープカレーを同市北信町の「caféSHIRINA(カフェ シリナ)」で販売した。経営者の視点を学んだ一環で、20日(日)は、おにぎり、ケーキを白替わりで売る。学生2人が入るすずき班に分かれ、市の専門店の協力を得ながら商品考案した。19日朝から学生が同店に集まり、地産地消を進めようと考案したスープカレーの調理開始。エフキタ氷をベースとして凍らせたいのき氷を、メンバーの家で収穫したカボチャやタマネギなど地元野菜を多く入れた。

完成した午前1時半すぎには「スープカレーいかがですか」と店前を通る人たちに声を掛け、「清泉の生が作ってます」とPR。味わった同市南信町の田原美知代さん(60)は「スープカレーは初めて食べなければいけない。学生が地域と連携と、地域活性化になる」と喜んでいった。

スープカレー班の社長を務めた堀口直美さん(19)は「女性をターゲットに体にいいカレーを自給した。お金を頂いて料理を出すには、しっかり責任感を持つことが重要なんだ」と話した。

20日はパンとスープ、21日はおにぎり、22日はケーキをメニューのセットをいすれも午前1時半から販売する。どれも1食500円で、を朝食前後用とする。

自分たちで考案したスープカレーを運ぶ清泉学院短大の学生たち

写真が動くよ! スマホをかざしてね

○集めた記事を見て、自分が持っている意見は何か考える。

・画用紙に大事にしたい記事をはり、見出しをつける。
※子どもたちが自分の意見をはっきりさせるためには、見出しを書いた方がよいと考えた。子どもたちには、「自分が集めた記事を見ると、大事にしたいことがわかると思うよ。」

○記事に対して、
自分の考えを書く。



それを見出しにしてごらん。見出して、結論だったよね。」と伝えた。

→はじめは、どうしてよいかわからない子どもたちであったが、互いに記事を見せながら「ねえ、この記事から私が大事にしたいことって何だと思う？」と聞く姿も見られた。

→時には、4人で一人の記事を眺める場面もあった。「これからいいことってなんだろう」と考えることで、友達への理解も深まったようだ。

・考えた見出しをもとに自分の意見文を書く。

※見出しが決まっても、すぐに意見文を書くのは難しいと思い、見出しに關係する「プラスの経験や出来事」「マイナスの経験や出来事」を具体的に書くようにした。

→子どもたちが困ったのは、「書き出し」の部分。作文とは違い、どう書き出すのがよいか迷っていた。N児が「10代からっていうのを見ると、いきなり意見を言っていることもあるし、経験から書き出していることもあるから、どっちでもいいんだと思う」といったことで、10代からを参考に書き出す姿が見られた。

→自分の経験を書き出すことにより、自分が言いたいことをより詳しく考える姿が見られるようになってきた。

○グループで意見
交換し、新しい
考えを持つ。

○友達の意見を参
考に自分の考え
を見直す。

自分と友
をつなく
新たな事

実と自分
をつなく

・自分の考えを友達に伝える。

・友達の意見を聞く。

・友達と意見を交わし、新たな自分の考えを持つようにする

※友達の意見を後から見返せるように、付箋を利用した。

ただし、この付箋に感想を詳しく書くのではなく、一文だけ書いて、残りは自分で伝えるようにした。

※付箋は、色分けをして視覚的に意見の違いに触れられるようにした。

2 (本時)
○活動を振り返る。



黄色→共感できること、自分もそう思う。

青色→自分は違う考えだ、もっとこうしたらどうだろう？

赤色→もっと詳しく聞きたい。

→自分が集めた記事を紹介しながら、意見文を発表していた。発表後は、友達の意見について自分の考えを伝えていた。このとき、子どもたちが多く使用

したのは、黄色の付箋。友達が考えたことを一生懸命受け取り、それに共感しようとする姿が多く見られた。

→友達の意見を聞くことで、さらに自分が大事にしたいことを見つめ直す子がいたり、考えもしなかったけど確かにそう思うと新しい意見を持ったしていた。意見を聞くことで、自分の考えを広めていった子もいた。

(5) 単元を終えて

つながりを大切にしてきた、K 児の新聞記事のまとめと意見文である。



一授業後の日記一

今日、国語の時間に私の新聞と似ている新聞を見ました。R 君と S 君のものです。似ているというか、大切にしていることで、S 君は目標を立てると言うことで、R 君はいやなことはいやとかそんな内容でした。私が似ていると思ったことは、いやなことはいやということを本当はいいたい R 君がいてそのことがいえたらつながっているんだと思いました。みんなではないけれど、似ているものを見つけてうれしかったし、もっと大切にしたいと思いました。

K 児が感じたことは、自分と似ている価値観を持っている人が身の回りにもたくさんいるということである。それが、自分の元気につながっていると感じたのだと思う。この学習を振り返ると、新聞を通じて子どもたちは自分の価値観に気づき、それを深めていった。そして、社会で起きていることやいろんな人の考えに触れることができた。私自身も、新聞は自分を見つけるツールとなり得ることを、学ぶことができた。

このように、自分自身が新聞や子どもたちの新しい姿を見つけることができたのも、機会を与えてくださった方のおかげある。感謝の意を表し、まとめとしたい。

< K 児が書いた意見文 >

つながりを大切にしたい

私がつながりを大切にしたいと思ったわけは、つながりを大切にしている記事をたくさんみたからです。それぞれ、やっていることは違うけど、とても元気がもらえました。

例えば、「野菜販売で駅前元気に」では、「買い物に不自由しがちな人たちに安全なものを届けたい」と頑張っています。買いに来る人も「毎週来たい。」という気持ちがつながっていることに元気がもらえると思います。

そして、身近なところにもたくさんあると考えます。私は、友達に電話で忘れたことをよく聞かれることがあります。そのとき電話でのありがとうと直接言われると「ありがとう」は気持ちが伝わるからとてもうれしいです。だから、身近なところにもつながりがあると思います。

でも、今の日本には人と人で直接ではなくスマホやインターネットで知り合うことがとても多くなってきています。それは、一人がつながっていると思ってても、被害に合ってしまうことがあります。私が、これが人ごとではなく、いじめなどでもそうだと思います。今、私の周りにはいじめなどはないけれど、人ごとになりがちになって悲しくなったり不安になったりしている人が多くいました。もし、つながっていれば、話し合ってお互いのことを理解し合えれば、悲しくなる人も減ると考えました。

だから、私は、まず自分に近い友達や家族とのつながりから大切にしていきたいです。